

沖縄歴史の散歩道 vol.15

◆墓を巡る①

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



仲原遺跡（うるま市伊計島）

各所にある石灰岩丘陵の崖のくぼみや洞穴に遺骨を葬る風葬墓もありましたが、さらに時代が下ると、こうした洞穴に木造の建物を建てて墓とする方法が登場します。宜野座村の漢那ウエヌアタイ遺跡には洞穴の中に木製の家型墓が残つております。

沖縄では、このほかにも様々な墓の様式や葬り方が存在していました。貝塚時代やグスク時代には土葬も行なわれており、伊計島の仲原遺跡（うるま市）では廃棄された住居跡に死者を葬る「廃屋墓」も存在しています。ぐそばに土葬墓を作るパターンが見られます。

沖縄の墓といえば亀甲墓や破風墓をはじめとした独特な様式である点があげられます。本土のよな石塔の墓は一般的ではなく、一族門中がに入る大規模な墓であることが特徴で、その姿は家と間違われるほどです。かつては風葬という独特な葬り方もしていました。

伝承では「グツチャ按司」を葬ったとされています。家型墓は現在、宜野座村立博物館に移設されており、現地には同型の墓が復元されていますが、もとの墓の木材を調査したところ、なんと13～14世紀のものであることが判明しました。つまり確認されているなかで沖縄最古級の木造建物となります。



漢那ウェーヌアタイ遺跡の 家型墓（官野座村）

時の県令（知事）の上杉茂憲がこの地を視察に訪れた際、百按司墓は老朽化し、壊れた木棺から多数の遺骨が野ざらしになつてゐる状態でした。上杉は風葬を野蛮なものとして問題視し、県の予算を投じて「目隠し」の石積みを構築します。本土の視点から沖縄の風習を「改善」しようとしたのです。百按司墓は古琉球だけではなく、沖縄の「近代」を伝える遺跡であるといえるでしょう。



百按司墓 (ムムジャナバカ)
(今帰仁村)

上里 隆史
(うえざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ボーダーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。